
カメの実像と虚像

歴史を甲に

珍しい動物、というのを想い浮かべるでしょうか。
パンダ？ コアラ？ ヤンバルクイナ？……いろいろと
名前はでてくるかもしれませんが、変わっているという
点ではカメはなかなかのものです。ふだん見慣れている
ために、そうは感じられませんが、もしカメが数少く
て、滅多に接しられないものなら、珍奇動物のリストの
一位にあげられるかもしれません。ではどんな点が変わ

っているのかというと、その甲羅です。われわれヒトを
含めて、哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類・魚類などの、
日常的に接するある程度の大きさを備えた動物には、全
て脊骨があります。体を内側から支える骨格があるため
に、体も大きくなれたわけです。こういう動物を脊椎動
物といい、体の外側が固い、昆虫等の外骨格動物と区別
されます。動物界には、この他、全く骨格のような支持
物のないものも多数あります。カメも立派に内部骨格の
ある脊椎動物なのですが、そのくせ、外側に骨を出して

千石正一

もいます。こんな動物は他にいません。そういう点で、カメは珍しい、といえるのです。

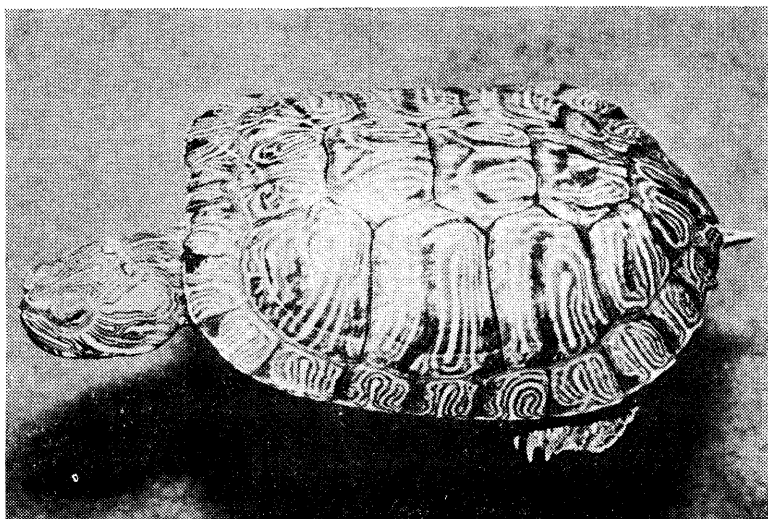
いまカメは外側を骨で包まれているといいましたが、正確にはもう少し説明を要します。カメの体はまず肋骨等でできた骨質の甲羅で包まれています。その外側、つまり最外層は、ヒトでいえば爪のような成分の板に覆われています。カメの甲羅を表面から見ると、こういう板が何枚か組み合わさっているのがわかりますが、その下の骨もまた何枚か組み合わさっています。しかもその継ぎ目（縫合部といえます）は、上の角質の層の継ぎ目とはずれています。もし継ぎ目が同じ位置にあれば、そこに外力が加えられた場合に弱くなりますから、しっかりとさせているわけです。また、カメの甲は全体として丸っこくできています。これも、どの方向から力を加えられても耐えられる構造です。日本のカメは多かれ少なかれ水棲ですので、泳ぐための流線構造も持たねばならず、全体として甲はやや扁平になっていますが、外国産の陸棲カメには、甲が球状というか、ドーム状の種類も

います。

こういう甲の構造は、長い進化の歴史の間にでき上がったものですが、今から二億年以上も前のカメの先祖の化石で、すでに立派に甲ができています。いいかえれば、カメはその後あまり変化することなく、重い甲に歴史を刻みこみながら、今日まで生きのびてきたのです。カメのこういう進化、ないし生存の方法には、防禦に徹するという主題が流れているように感じられます。外敵に襲われた場合、手足を固い甲の内部にひっこめて、こちらからは手を出さない、敵のほうも甲にははまれて手も足も出せない、という関係が長い間続いてきた図式であることには、なにかアイロニカルな匂いもします。

いろいろなカメ

現在世界中には二五〇種ほどのカメがいます。地中に潜ったりするものは多くいますが、構造上、立体的な活動は苦手で、よく木に登ったりするものはいません。防禦のためによくできた甲羅は、行動能力のほうは犠牲に

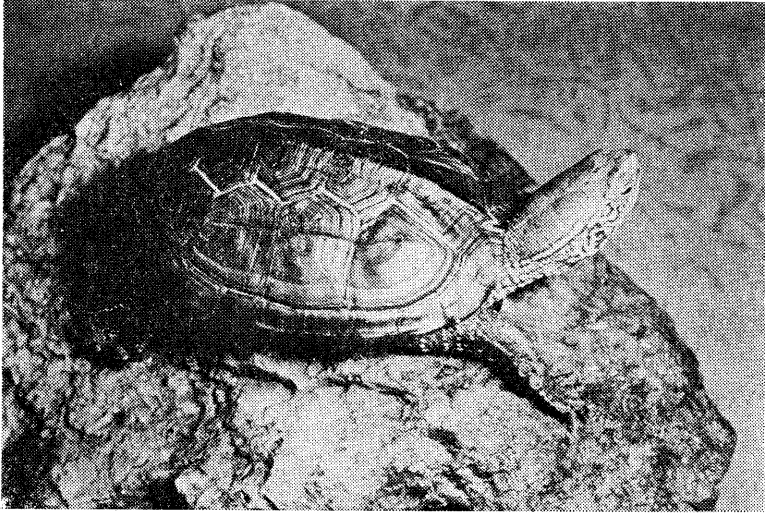


▲ミシシippiaアカミガメ

しているわけですが。行動範囲が平面的といっても、高山に棲む種類もいますし、海棲の種、また砂漠に棲むカメもいます。カメといえは淡水域の水辺にいる半水棲の動物だ、というのは、狭い知見による独断的なイメージに過ぎません。カメ類全体としては、現在の地球上で割にいろいろな環境に繁栄しているグループなのです。

現在のカメは潜頸類と曲頸類という、二つの大きな分類群に分かれます。潜頸類は首をひっこめるカメで、北半球にはこれしかいません。われわれが見慣れているタイプです。南半球には曲頸類もいます。首を甲の中にひっこめることはできず、横に曲げて隠すカメです。防禦の方法として不完全であることで推察できるように、曲頸類のほうが古い型です。古い大陸であるオーストラリアにはほとんど曲頸類しかいませんから、生粋のオーストラリア人は首をひっこめるカメを見たら、首をかしげるかもしれません。

日本のカメ



▲クサガメ

ウミガメを除くと、日本には7種のカメがいます。日本本土でスッポン・ニホンイシガメ・クサガメ・ミシシッピアカミミガメ、琉球でリュウキュウヤマガメとセマルハコガメが見られ、両方の地域にまたがって分布しているのがミナミイシガメです。それぞれの種の分布域は限られているので、これらの全種を見たことのある方は多くはないでしょう。

ミシシッピアカミミガメは、もともとは北アメリカの原産で、「緑亀」という商品名で莫大な数の仔亀が輸入され、ペットにされました。それらが逃げ出したり、捨てられたりして日本に帰化したのです。日本在来のカメよりも水質の汚染に強いようで、それらを駆逐しつつあります。最近では、大都市周辺では目撃する機会が多（数の多い）カメとなっています。在来の固有文化がアメリカ文化に侵略されている様を皮肉っているように気分の良い現象ではありませんが、自然の生態系という観点からみれば、事態はもっと深刻です。のんびりしたカメも、自然破壊を如実に示しているのです。これら



▲リュウキュウヤマガメ

の帰化個体群の供給源は、意識的にせよ無意識的にせよ「野良ガメ」なのですが、日本には、飼いきれなくなった動物を放つ、という悪習があることが根底として無視できません。自然保護のためにもこれはつつしんで欲しいことです。他の場所に放つというのは最終的にはその動物にも悪い結果となりますし、なによりわれわれ自身の首を締めることとなります。また、カメを例にとるなら、山紫水明の地に棲んでいた日本在来の種が生きながらえるようにしてやるのが日本人の努めでしょう。

ニホンインガメは本来の生息地が溪流のようで、かつては割に見られたようですが、近年はかなり減っている様子です。この種の仔亀は甲が円いため、「銭亀」と呼ばれます。数十年ほど前までは、縁日等でこの「銭亀」が売られていましたが、そのうち数が減ったため、「銭亀」というのはクサガメの仔亀に対して用いられるようになりました。そのクサガメも中国等から輸入されている現況で、ついには最も大量に安価で販売されるカメは北アメリカの亀農場で養殖されたミシシッピアカミミガ

メ、「緑亀」となったわけです。

ミナミインガメは東南アジアに広く分布するカメでして、日本では八重山群島と、トカラ列島の悪石島、本州の京都付近に分布しています。分布域がこのように飛び石状で不連続なのは大変に不思議な現象です。いったいどのような歴史的背景がこれにあったのでしょうか。

リュウキュウヤマガメは、最近ではヤンバルクイナ・ヤンバルテナゴコガネの発見で有名になった。沖縄島北部のヤンバル地域を中心に分布するカメです。この地域には古いタイプの動物が多くいますが、リュウキュウヤマガメも大変に古い、遺存的な動物です。最近は山地の開発や捕獲によって減少していて、日本のカメでは最も絶滅が心配されています。天然記念物に指定されていて、一応の保護策はとられているように思えますが、採集や売買は後を絶ちません。天然記念物というのは文化財ですから、そういう行為は国宝の盗みや売買にもたとえられるべきなのですが、あまりそう感じられてもいないようです。日本人には、自然物は所有者がないもの、

という考え方が一般的なようですが、とんでもない、人類全体の財産なのです。それを一部の人間の利益のために使われないようにしていくには、結局われわれの自覚が最も重要な役割を果たしていくと思います。

セマルハコガメは八重山群島にいます。前種同様に半陸棲のカメで、水に入ることはいりません。見つけたとき、人間には苦手な水中に逃げ込むことが少ないため、発見されれば容易に捕えられてしまいます。セマルハコガメという名は、甲の背面が丸いことと、甲が箱状になってしまふことに由来します。敵に襲われると、手足をひっこめるのみならず、甲の腹面に蝶番があって、その前後を動かし、甲で蓋をしてしまうのです。こういう「箱亀」は、日本には一種しかいませんが、カメの進化の中では、防禦という主題にそった変奏曲として、くり返し何回も現われています。つまり、世界中には系統の異なる「箱亀」が相当多種類いるのです。制約の大きい体の構造ですから、カメとしてはあまり他によい身の守り方がないのかもしれない。

カメの飼い方

ヘビやカメ等、エキゾチックな爬虫類を飼育するのは、欧米ではマニアの多い趣味ですが、日本ではごくふつうなカメ以外には飼われることは少ないでしょう。ここでは、日本で最もポピュラーな種類、ミシシッピアカミミガメとクサガメを中心に、飼育法を述べてみます。

まず飼育容器ですが、水場と陸場を用意して下さい。こういう水亀類は、陸場で日光浴することによって、体温を調節したり、病気を予防したりしています。コンクリートブロックでもよいですから、陸に上がれるようにして下さい。その表面はなるべく乾くようにし、また、面積はカメの甲がはみ出さない程度に必要です。「親ガメの上に子ガメを乗せて……」というのは、ほほえましいと人間が勝手に解釈しているだけで、実は日光浴場の面積が不足しているために起こる現象です。水場から陸場にかけては、傾斜をつけてカメが登りやすくしてやるとよいでしょう。

水深は深いぶんにはかまいませんが、ふつうはカメの甲羅の高さ以上、その3倍くらいまでがよいでしょう。

あまり浅いのはよくありません。カメは爬虫類としては大食で、よく水を汚します。糞や餌の食べ残しを取り除くのは当然の世話ですが、水換えも重要なこととなります。水換えの手間を省くなら、なるべく大きな容器がよいですし、水換えをこまめに行うなら、かえってあまり大きくない容器のほうが便利です。

脱走を防ぐために、容器には蓋をするか、壁の高さを高くします。壁の高さがカメの甲羅の2倍以上あればまず大丈夫ですが、複数を同居させておくと、他の個体を踏み台にして逃げることもあります。居心地が良ければカメもそう脱出しようとしません。いつもカサカサと動きまわり、壁をひっかいているようなら、どこかその環境にカメの好まない点があって落着かないのです。

カメには日光浴が欠かせません。一日に一度はできれば直射日光があたるようにしてやって下さい。ただし、

野生のものと違って温度の異なる好きな場所に移動できないので、狭い容器内でうだってしまうこともあります。暑くなり過ぎて死ぬこともありますから、その点も充分気を付けましょう。陽のよく当る地点と、日陰とを作っておいてやれば、多少でもそれは解消できます。いずれにせよ日光浴時間には気配りが必要です。

餌は蛋白質を中心として下さい。いろいろなものを食べますが、パン等は良い餌ではありません。煮干しやシラス干しを水でもどして塩を抜き、柔くしたものの等は良い餌です。ツミレもあまり水を汚さず便利です。最も簡単なのは、固型の配合飼料（ペレット）で、鯉用の商品名スィミーというペレットか、九角鳥用のマイナーフードだと、これだけで飼うことができます。サイズに大小がありますから、飼っている個体が一口に食べられるものを選びます。一回に与える量はそのカメの頭の大きさと同じぐらいにするのが目安です。何日も食べなくても平気ですが、できれば毎回少しずつ与えるほうが望ましく、特に成長期の仔亀にはその配慮が必要です。

水換えや掃除は回数を決めずによく、汚れたらその程度にして下さい。水を換えるとき、前の水温とあまり違う、冷たい水をいきなり使うのはよくありません。カメは皮膚や甲羅が汚れるのが病気をまねくことがありますから、ときどきは柔いブラシでこすって汚れを落とすやるとよいでしょう。ただしあまりしつこくすると嫌がります。同様な理由で、甲羅にペンキ等を塗ったりするのは避けましょう。

一般的な注意として、必要最少限以上にカメにふれるのは避けて下さい。カメは意外に神経質な動物で、犬や猫のように人間にじゃれて遊ぶことがありません。また、カメはサルモネラ菌を保持していることがあるので、カメをいじった手を洗わずにいると、食中毒になりします。ひとりカメだけでなく、サルモネラ菌は普遍的な菌ですから、基本的な躰けの問題ですが、特に幼児はおとなし気なカメにはすぐふれたがりますので注意して下さい。

カメは慣れれば飼い主を覚え、寄って来たり、手から

餌を食べたりするようにもなります。低い音はよく聞こえますから、音を出して条件付けたりするのも面白いでしょう。

繁殖させるためにはオスメスを数頭ずつ飼育させればよろしいのですが、人工繁殖はそう簡単ではありません。オスとメスの区別は、カメを裏返し、尾をひっぱって、尾にある総排泄口（穴）が、背中の甲羅の外縁よりも外側に位置するのがオスです。つまりオスのほうが尾の基部が太くて長いのです。仔亀の間には区別ができません。また、ミンシッピアカミミガメもクサガメも、メスのほうがずっと大きくなります。

卵は地中に産みますから、庭の池等で、周囲を土にしておくのが、最も簡単に繁殖させられる飼育法です。いつのまにか仔亀がフ化しているのがみられるかもしれません。

カメは長寿の動物とされていますが、普通の水亀類は数歳で成熟し、10〜30年が寿命のようです。それでも、まともに飼えば、普通の犬や小鳥よりも長くつき合える

ペットでしょう。

これからもカメと

「もしもしカメよ……」で有名な、のんびりした雰囲気
の動物ですが、実際には歴史を背負った、変わった動物
群であることがおわかりになったかと思えます。また、
事実をはなれた、人間側の勝手な思い込みがいくつかあ
ることも。カメは、その進化史のずっと後輩である人間
とも、長い間共に歩んできたのです。ゆっくりとしたマ
イペースで。ものいわぬカメですが、人間側が考えるべ
き反省点もいくつか示唆してくれています。そういう
「声」にも耳を傾けるようにして、今後とも人類の歴史が
終るまで、カメとつき合ってくれることを、全ての方に
お願いしたく存じます。

（財団法人日本野生生物研究センター）